

# 寒冷草地の秋の手入



## 三浦 梧 楼

えん麦実とりや、亜麻等に混播した春まき牧草は地域によつては秋までに十分な生育を望めないことがありますから、放任せず次への施肥を行ない、牧草の生育を旺盛、強健に導き冬に備えましょう。

### (1) 施肥

遅くも九月上旬頃に追肥を行ない、牧草根の定着を早めることが大切で、肥料はもちろんだ速効性のものを用いますが、一例を挙げますと、一〇坪当り

〔家畜尿または堆肥漚汁 七〜八〇〇キ〕

〔過燐酸石灰（尿汁に投入）一、二キ〕

または家畜尿や漚汁のないときは、

〔硫 安 八キ〕

〔過 石 一、二キ〕

前後を施用します。

### (2) 掃除刈り

保護作物を入れた場合でも、牧草の春まきは雑草の繁茂が激しいものですから、牧草地の状態をみて一回掃除刈りを行なうと、その後は牧草の生育が良くなり、効果的です。

また掃除刈りが遅れて、牧草が消滅した場合は来春の追播が必要ですから、この際も雑草種子の落下しない中に刈り取りを行なうことが必要です。

### (2) 軽い土壌の処は鎮圧を

軽い土壌や、地下凍結の甚だしい土地では牧草根を十分土中に張らすことが冬枯れ防止上大切で、このためには九月上旬頃に、鎮圧ローラー（ストグラ）の一回転を、牧草の上長成長が抑制され、更に分蘖が促進され、冬越しが効果的に行なわれます。

## 二 二年目以降の牧草地の手入

二年目以降の草地の秋の手入れとして行なわれることは追肥、追播（比較的秋の長い地帯）、掃除刈り、飼肥料木植込み、枝切り、利用の適期切上げ等であります。

### (1) 追肥

秋の追肥は主として越冬を良好にし、翌春の萌芽を旺盛にするために行ない、草の越冬養分貯蔵を良好にするのが目的であります。したがって寒冷地の冬枯れの心配のある地帯では燐酸、加里肥料を主として施用します。石灰は、積雪地で春の融雪水で流亡するおそれのある地帯以外は秋に施用します。

しかし積雪地でも牧草に菌核病の発生する地帯はこの予防を兼ねて秋に石灰を施用することもよいでしょう。この際は消石灰を一〇坪当り八〇〜一〇〇キ程度が一応の標準となります。

### (2) 追播

秋の短い高冷地、あるいは寒冷な北部地帯では春に追播を行なうのが安全有利ですが、播種後、霜まで二カ月程の間をみれる地帯では秋に追播を行ないます。

この時期は掃除刈りの終つた野草、雑草類の殆どが枯れて生活力がなくなりますが、この時期に牧草の追播を行ないますと牧草は秋の中に十分根を張りますから、春野草や、雑草に優占して、追播の効果を期待することができます。

追播は施肥、種子床作り（レーキやハロで表土を浅く膨軟に掻き起す）播種、覆土、鎮圧の作業を一応の手順としますが、

草地の状況によつて（例えば全面に牧草の生えているような場合の追まき）種子床作り、覆土、鎮圧等は省略することもあります。

### (3) 掃除刈り

不食草や、野草の優占草などはなるべく早い時期に刈り取り、草を弱らせると共に種子の落下を防ぎます。またこの不良草の抑圧のためには殺草剤を使用したり、刈草、ムシロ等で庇陰して光線を甚だしく不足させて弱らせることも行なわれます。

また掃除刈り時に不良草のギンギン（ノダイオウ）の抜取りも励行したいものです。この草は刈り取りや、多少の庇陰では退治困難ですから、手間はかかりますが、根の抜取りが必要でます。

### (4) 飼肥料木の植込み、枝切り

草地を早害から護り、防風、土壌流亡に効果があり、更に地力増進にも役立つ草地への飼肥料木植込みは秋が好期でます。その目的によつて植込み本数も違つてますから、概その用途を示しますと、一〇坪当り

(1) 草生庇陰林の場合二〇〜三〇本の喬木仕立。

(2) 截枝林、つまり枝条を飼料として利用する場合は五〇本くらいを植付け、二〜三年で枝を切り四方に拡張させます。

(3) 傾斜草地の侵蝕防止を目的とする場合はハギ、イタチハギを等高線沿に五〜一〇坪間隔で三列ぐらゐの列状植樹を行ないますと、土壌の流亡防止と草生庇陰の両効果を狙うことが出来ます。特に傾斜のひどい処では傾斜頂部

## 一 新播牧草地秋の手入れ

寒冷地の牧草地、秋の手入れはどんな点に注意して行なつたらよいでしょうか。

(1) 春まき牧草は保護作物収穫後の生育を盛んにすることが大切

の三分の一位は広葉樹と針葉樹混滑の山林を造成して置き、三分の二の採草斜面には飼料灌木類の列状植栽を行なうのが効果的だ。

しかし、これら草地林も繁茂が旺盛となり、草地の庇陰が強くなり、却つて草生を低下することになりますから、このような場合は秋に枝切りを行ないます。

(四) 利用の切上げ時期

草地利用の切上げ時期は牧草の越冬、翌年の草生に大きく影響します。

一般的にみますと、放牧、採草とも少なくとも初霜の一カ月前位に切上げるようにしますが、積雪が多く土壤凍結の少ない地帯についてはみますと、初霜の直前から二〇日くらい前の刈り取り、放牧は最も冬枯れを誘起しやすい傾向が強くその時期をはずれた早刈りまたは遅刈り等は冬枯れには影響を認めないようです。

ただしルーサンのような深根性牧草はその時期でも冬枯れには影響がないようです。

また積雪の少ない地下凍結のはげしい地帯は越年の草丈が短いと凍結が深くかつ土中に霜柱氷霜ができる際に赤クロバのよいうな荳科草の主根を切断され春先の乾燥で枯死することが多いので注意しなければなりません。つまり、土壤凍結地帯では越冬前に相当草丈を伸ばして被覆度合いを高め土壤凍結の緩和をはかることが肝要です。

(六) その他の管理

(イ) 排ふんの処理

放牧地に不食過繁草を生ぜしめる家畜の排ふん処理も秋の時期に行ないましょう。

この時期の排ふん処理はホーク等でカキ散らすのがよいでしょう。

(ロ) 冬期間の鼠害防止

最近ラデノクロバの普及に伴つて、野ネズミが草地に対し相当の被害をあたえるようになりました。特に積雪地では冬季餌の枯渇する積雪期間にラデノクロバの圃場に集中して大害を与え、せつかく早春の利用を期待していた集約草地在荒らされる



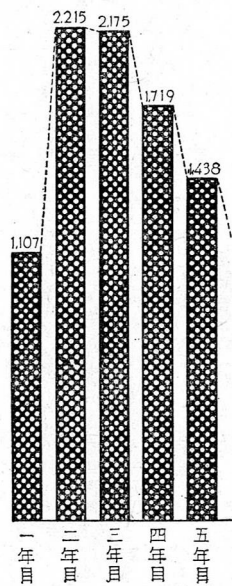
よく管理された草地は牧養力も大きく、草の生産も上がります

ていたりまた水田畦畔が荒らされていたりする例が各所に起きております。この防除法については薬剤を使用する場合と、機械的防除と二通りありますが、薬剤を使用する場合は、炭酸バリウム、黄燐製剤(ねこいらす)及びモノフォール酢酸ナトリウム(フラトール)の三種が主として用いられますが、殺鼠効果及び価格の点からフラトールが優れております。

毒餌の作り方の一例をあげますと、蒸しイモ四キ、フスマ適量、フラトール二五〇ccを混ぜ一個三〇〇g程度の団子としたり、ビスケットにフラトールを塗附し雨露や雪による毒餌の腐蝕を防止するために鉄板や、蠟引紙製の三角型毒餌容器に十数粒の毒餌を挿入して約一五gの間隔に一個の割合で降雪前にクロバの繁みなどの地被物の下におくとよく、毒餌容器として、更

に太い竹筒、ビニールポリエチレンの小袋を利用することもよいでしょう。その仕掛け時期は十一月の根雪直前と、出来れば雪どけの三〜四月頃の二回としますと効果的です。

第一図



一方機械的な方法として、草地の周囲に防除溝を設けることも有効です。これは降雪後には効果は期待できませんが、降雪前に草地に移動侵入するものには効果があります。深さ六〇cm、幅四五cmの明溝を掘り内部に落ちたネズミを捕えるために約二〇cmに毎に墜落籠を埋めネズミを誘導する方法、更にその他に深さ六〇cm、幅三五cmの円筒形のおとし穴を掘つてネズミを捕えるなど、種々の機械的防除の方法が薬剤の補助手段として用いられます。

(ハ) また排水不良の土地には排水溝をつくり、春先の融雪水の停滞のないようにすることも冬枯れ防止上大切です。

三 草地の更新

よく造成され維持管理された草地でも年数の経過と共に生産力が低下し、草の質も劣つて行くものです。牧草地がなぜ荒廃化するかについては三つの要因が関係していると考えられております。

すなわち、(1)不良気象条件、(2)不良土壤条件、(3)不良な管理です。つまりこの三つの要因が最高、最良の状態ではじめて高い生産を永年に亘つて期待されるわけですから、いかに最良の管理を行なつても年数の経過と共に生産量の低下は避けられないと見るのが一般であろうと思われれます。ここに草地更新の必要があるわけですね。

今北海道農試において調査した完全更新草地の経過年数と生産量の変遷をみますと第一図の通りです。

そして牧草地の更新は土壤、地力の程度、草種、経過年数、雑草の種類、放牧家畜等を考慮して時期と方法を定める必要があります。

耕起更新を行なう場合は主として秋に行ないますが、地下凍結降雪前に深耕し石灰を十分散布しておきます。

(雪印種苗・上野幌育種場場長)